

# 書肆えん通信

No. 9

2023・6・25

書肆えん

秋田市新屋松美町

5-6

## 母の食物訓

明治十一年生まれの母は料理の味付けが上手だった。と言うのも、祖父も曾祖父も軽輩ながら「お館様」のお供をして幾度となく江戸に上り、高級料亭にも相伴したらしい。

佐々木家の料理は特に高価なものや珍しいものを使うわけでもなかったが、すこぶる衛生的で味も他の追従を許さぬものがあった。味はどちらかといえれば京風で、例えば、お正月に食べる落ち鮎の焼き干しを使ったりお吸い物などは、一度蓋を取れば最後の一滴までお椀を置かれないほど美味であったという。薬味といえ、ねぎ、生姜、唐辛子ぐらいしかなかった秋田の家庭で、吸口に柚子や木の芽を使うのもめずらしかったようだ。

### 「好さんの 綴り方帖」 より

母の食物訓……………	1
父の後ろ姿……………	3
ボダッコ礼賛……………	5
私の洋服コトハジメ……………	6

秋田生まれの母は海魚の眼利きも上手だったが、その代わり横手の代表的惣菜であった煮豆類や納豆汁、里芋の葛かけ、干鰯やイルカなどは食べ慣れないものだったと見え、自分では料理しなかった。

また、毒断ちはいたって厳しく、おなかをこわしたときは○○、はしかのときは△△とやかましく言われたものである。今でも人一倍食いしんぼうの私が、そのいましめを守れるのは、幼い頃のしつけが身にしみて入るからだろう。戦前から、食物と健康についてこだわり続けて来られたのもそのせいかもしれない。着色、防腐剤を拒否することや、一日三十種類の食品を摂取することを「友の会」で教わって以来、今でも心がけている。

母が亡くなって三十数年たったが、思い出すままに母の食物訓を書き出してみよう。

一、時ならざるを食わず（旬でない食品は高価で、栄養分も少ない）

一、多かつたら一口でも残せ(腹はごみ桶ではない)  
 一、変だと思つたら吐き出せ(おかしいと思つたが  
 食べてしまつたでは手遅れだ)

一、疑わしくば一鍋でも捨てよ(昔は大鍋だった)

一、憎い鷹にも餌えばをやれ(食物で差別を付けるな)

一、酔の物の好きな人は若い(NHKの番組で実証)

一、可愛い子には餡を取つたまんじゅうを与えよ

(虫菌の予防)

一、虫菌は線香のあとぐらいの時治療せよ

私の家は本屋のほかに新聞販売業を営んでいたので、  
 金のない割には使用人が多かつた。

「この人達は自分たちの手足だから大事にせねば」  
 が母の口ぐせで元日には全員を集めて二の膳付きで御  
 馳走をした。不況の嵐が吹き荒れた昭和の初めは、使  
 用人ならずともだれもが貧しい食生活の時代である。  
 あんこたちは、風呂に入りながら大樽から大根漬をぬ  
 きとつては食べ、風呂のうめ水を飲んだ。春には「カ  
 ド干し」を頼むと数日のうちにカズノコが跡かたもな  
 く消え失せるといった有り様だったが、母はそれを咎  
 め立てしなかつた。

お手伝いや女子供には、雛祭りの前日に豆腐を一揚

げ(十二丁)を与えて、かまぼこ作りの練習をさせた。  
 それは花嫁修業の一つでもあったらしい。土崎に嫁に  
 行つたあねこは豆腐カステラを売って評判になり、北  
 海道に渡つたあねこは、教師をしている夫の同僚の奥  
 さん達に料理の講習をして喜ばれた。

冬になると、使用人達の一人一人に貝か焼きを食べさ  
 せた。しよつたる貝焼きの時は、一人で御飯を五杯も  
 食べるものもいた。あかあかと燃える熾火を入れた「風  
 呂っこ」がずらりと並ぶ飯台は実に壮観だった。そこ  
 には使う者も使われる者も、乏しいながら季節季節の  
 食べ物を分け合つて食べる喜びがあり、愛情と彩りに  
 満ちた食生活が存在していた。

今飽食の時代、一億総グルメ時代といわれる日本で、  
 手間ひまかけた食物が見直されてきたのは、食物の本  
 当の豊かさを味わつた祖先の血を、私達が確実に受け  
 継いでいるからだと言えないだろうか。

〔あさひ川〕第21号、昭和63年2月〕

## 父の後ろ姿

「灯のもとに少しかがみて物書ける 六十路の父のうしろ姿よ」

これは大正の終わり頃、私が作ったおそらく最初で最後の短歌である。ことしは父の二十三回忌に当るが、六月の法要のとき、私は風邪をこじらせて最悪の体調であった。そのせいかどうか、近頃しきりと父のことが思い出されてならない。

慶応二年寅の正月、父は富裕な商家に生まれた。幼い頃より学問が好きで、和知塾に学び、神童と呼ばれた時期もあったらしい。そんなわけで、交友関係は、内町の（士族）人達に限られ、外町の人とは肌が合わないといつて付き合わなかつたようである。東京の商業学校に入れてくれるよう親に頼んだが、商人に学問はいらないと言われ、躰ならし（修行のために他人の家の飯を食べさせること）に「斎万」に勤めることになった。そこのおばあ様がよくできた人で、失敗したときは、物陰に呼んでやさしく教えてくれたという。

結婚後に分家して、書物屋と新聞屋を始めたのも、

学問への断ち難い夢を本に託して、地方文化の発展にいささかでも貢献したいと思つたからであろう。しかし性格的に儲け方は下手だったし、火災保険のない時代に二度も大火に見舞われたうえ、とどめを刺したのは教科書の検定制度だった。翌年から教科書が国定になるという情報が、横手に届くまでに、大変な時間を要する時代である。印刷した鮮進堂発行の教科書は、全部紙屑になつてしまつたのである。家屋敷は人手に渡つたが、幸いにも貸し主が親類筋や知己の資産家だったので、「放蕩したわけでもないし、運が悪かつたのだから」と長期の月賦で勘弁してくれた。鮮進堂が夜逃げもせずに創業百余年を迎えることができたのは、この方々のおかげである。

私が父を尊敬し始めたのは、自分が還暦を過ぎてからである。若い頃は背が低く風采も揚がらず、金儲けの下手な父親を恥ずかしいと思つたものだが、自分も年を取つてみると「のんきなとうさん」などと陰口をたたかれてきた父の、大きさ、深さがだんだんわかつてきたのである。

私は父の四十五歳の時の子なので、孫のように可愛かつたらしい。金持ちの子しか入らなかつた幼稚園にも、園長と友達のよしみで入れてもらつたし、お琴も

習わせてもらった。晩酌をする隣に私を座らせて、左手でおかつぱの前髪を上げながら、右手で「このわた」「うに」「からすみ」などの珍味を「アーン」と口に入れてくれる父であった。酒を飲まない私が酒の肴が好きなのは、そのせいだと思っている。

父はまじめを絵に描いたような人だが、なかなかの風流人であったし食道楽でもあった。

ありふれた茶碗にお茶をたて、それを飲みながら粗末な床の間に掛けた、穂庵の梅の一幅を眺めては「梅はみな蓄なのに、南向きの枝の花だけが開いているところがよい」などと語るのだった。

さかずきと切手のコレクションもしていたようである。友人と快く飲んだときには、きまって謡曲の「老松」がとび出した。また父は、江戸時代生まれの割りには油っこいものをよく食べた。鰻の蒲焼きが大好きで、朝食に生臭いものを一切食べない風習だったから「つゆっこだけでよい」と言いながら、御飯にかけて食べている父がおかしかった。

グルメ志向と旅行好きとくれば、現代の若者風だが、父は商売がらずい分各地を見聞している。一生に一度お伊勢詣で行ければ幸せな時代に、樺太にまで足を伸ばしている。今ならさしずめ南極にでも行った

心境ではなかったろうか。帰宅したその足で、前賢絵葉書の取材のため、大和まで出かけるという行動力には驚かされた。朝鮮から松の実、八沢木からはマタタビ、山梨から珍しいお菓子などを取り寄せて悦に入っていたし、食卓にゴマ味噌を欠かさなかったのも白い肌のとつやと九十一歳の長寿を保つ秘訣だったかもしれない。

父の五十代の頃の遺影は、どうみても商人の顔ではない。三輪田元道という（私立女学校の創立者）教育者によく似ているので私の好きな顔である。若かりし頃「十文字の訓導を命ず」という辞令をもらった父だが、とうとう教職につくことはなかった。卒論のテーマに大澤堅治の教科書出版事業を選んだ孫息子も、秋大を出て本屋の後を継いでいることに因縁めいたものを感じる。

あきんどとはいえ、父は上に何かがつくほどの正直者で、商売上の駆け引きさえできない人であった。晩年になってから、夜、うなされることがあったが、自分には悪いことをしたことがない、思い当ることといえ、ただ一度子供の頃、一文みせのバツパから「おんちゃ、おんちゃ、ひとり取ってつてくれ」といわれて、一文置いて二分分の焼きもちを持ち帰ったことが

心にかかっていると話してくれた。

八十を過ぎてからだろうか、父は「これから選んでくれれば有難いのだが」と自分の戒名を三つ四つ書いて見せてくれた。「瑞雲居士」と書くべきを「端雲居士」なんてつけられるといやだからな、と小声で言っていた。しかし実際の戒名は「文興居士」である。

ひとり娘で我がままな私は、親孝行らしいこともできなかつたが、亡くなる前年の冬からはお手伝いさんに頼まずに、汚れ物全部を洗たくした。二代にわたって親しくしていた医師からは、何でも好きな物を食べさせ、葉がいやだといったらのませなくてもよい。酒がのみたいといったらその通りにしなさいと言われたのでその通りにした。「好子お前が娘でよかったなあ」と言われたときはそれまでの苦勞が消し飛んでしまった。

あれから三十三年たって父の写真を見るたびに、店の忙しさにかまけてあまり世話ができなかつた自分が悔やまれてならない。「孝行したい時に親は無し」。昔の人はまことに適切な格言を持っていたものだ。

物書ける父の後ろ姿に何かを感じた十代。そして八十歳に手が届いた今の私に、父堅治の後ろ姿が語りかけるものは書き尽くせぬほど多い。

〔「あさひ川」第22号、平成元年1月〕

## ボダッコ礼賛

塩鮭と言ってもピンと来ない。やっぱり「ボダッコ」である。何というほのぼのとした親しみ溢れる呼び名だろう。古老の話によれば、昔アイヌの塩鮭とほだ（薪）とを交換したことからこの名があるということだが、真偽のほどは分からない。

さて私好みの食事と言えば、昔も今も変わらない。紅鮭の辛めのボダッコ、自家製の味噌で仕立てた、大根、里芋、午夢の実沢山の「おつけっこ」、たっぷりの麴を入れて漬け込んだ「鈍漬け」、これに焼海苔でも添えたら言うことなしである。

小学校の頃を思い出してみると、円筒形のアルミの弁当箱に、ゆで卵とボダッコを入れたものが最高のおかずだった。

慶応二年生まれの父は裕福な商家に育ったが、弁当にボダッコを入れてもらった日には、「一文」のお小遣いが貰えなかつたそうである。

大正時代から昭和の初め頃まで、ボダッコや筋子はどこの家庭でもお昼のおかずであった。カムチャツカの海で紅鮭やカラフト鱒を大量に捕獲することが出来たからだろう。ところが太平洋戦争が始まると間もなく、四方の海が閉鎖され、遠海魚はとんと口に入らなくなってしまう。あの頃は、白いまんまとボダッコをお腹一杯食べたいというのがみんなの夢であった。

今は飽食の時代、一億総グルメの時代と呼ばれ、食べたいものは何でも自由に手にいれることが出来て、あの苦しかった飢餓の記憶も薄れがちである。然し、相も変わらず私の舌と胃袋は「ボダッコ」と「白いまんま」を求めてやまない。贅沢な会席料理や、フランス料理を食べた後で、やはり行き着くところは「ボダッコ」と「ガッコ」なのである。先祖代々染みついた食習慣と嗜好ということになるのだろうか、とにかく我が家では息子も孫も大好物ときている。残りご飯でボダッコを入れた小さなおにぎりを作っておけば、またたく間に空になる。

家の者たちは「年寄りには塩辛いものを控えるように」と気遣ってくれるが、血圧はまあまあだし、歯も丈夫だし、平均寿命をクリアした私にとって、「食べたものを食べなさい」と言ってくれる医師の心遣いも

うれしい。

さあ、今日も「あきたこまち」の新米をほかほか炊き上げ、それにキリリと辛いボダッコの腹皮なんぞをのせて、もりもり食べることにしよう。これからは開き直りの余生である。おいしく元気に過ごしたい。

〔あさひ川〕第25号、平成4年2月

## 私の洋服コトハジメ

大正十年と言えば、ごく少数の袴組を除いて、全校児童がまだ緋や縞の着物に前掛け姿の時代であった。

頭脳明晰で、秋田師範学校を二番で卒業したという吉祥寺の叔母が送ってくれた「ワンピース」を着て、運動会に出たのが私の洋服の着始めだった。信じられない身軽さで、選手でもない私が、二等との差を20mも離して一等になった。

当時、男女共学ではなかったが、運動会だけは、女子小学校と男子小学校が、横中グラウンドで、一緒に行っていた。

男の子たちが「セヨジン頑張れ！ セヨジン頑張れ！」と応援してくれた。洋服の下に履く女の子のパンツなど町中をさがし歩いてもなかった。仕方なく、男の子の、クリーム地に縞の入った「さるまた」を買って履いたのだった。

私の「十間とばし」は、腰巻き対さるまたの勝利と  
言うことである。

当時の女子は、大人も子供もみんな腰巻き「ゆもじ」をしていたし、もちろんパンツなんてハイカラな物は売っていない。だから洋服を着る時は、短めのゆもじの上に叔母に作ってもらったズロースを履いた。秋田市の祖父が懐から手帳を取り出して、「それはジョロージと言うものだ」と教えてくれた。ジョロージには、ゴム紐でなく布紐が通してあって、便所にいく度に紐を解くのが面倒だった。女学校二年の時（満十四歳）、秋田市でテニス大会が開かれた。私は東京から送ってもらったセーラー服を着て、得意満面に応援に出かけたが、反省会の席で、洋服を着たことをひどくなじられて、泣く羽目になった。後年、同級生から聞いた話では、セーラー服がとても羨ましかったのだそうだ。

修学旅行の時は、私の他に遠藤さんと若林さんが洋服組だった。筒袖の着物を着た女の子たちが、朝の上

野界限を、ゾロゾロと並び歩いているのを、目敏く見つけた悪たれ坊主どもに「ヤーイ田舎の遠足だあ！」と囃し立てられたことを、七十年近くたった今も恥ずかしさとともに思い出す。

ひとり娘とはいえ、貧乏な本屋に生まれた私が、名家のハイカラさん達と肩を並べて、いや、いち早く洋服の恩恵に浴して、娘心にちよびりの優越感と満足感を与えてもらったのは、東京の叔母のお陰である。その叔母も九年前に数え年百歳の天寿を全うした。

大正時代、地方の町では女が洋服を着るといっただけで大いなる自己主張となったような気がする。

衣食住のすべてを、そして思想や感情までが統制された、あの忌まわしい戦争が終わって四十九年たった。若い子のへそ出しファッションにびっくりさせられるこの頃ではあるが、老若男女を問わず、伸び伸びとしゃれを楽しみ、自己主張できる時代は、老いの身にとっても嬉しい限りである。

\*「セヨジン」は「西洋人」の地方なまり  
（「あさひ川」第28号、平成7年3月）

## 【後記】

詩集『雪の吐息』の著者、駒木田鶴子さんの生家が、出版も手がけていた歴史ある本屋さんなので、その思い出を聞いてもらおうとおもっていたところ、詩「すずめコ すずめコ」のなかにてでくる秋田市生まれの祖母や、「書物屋」などについてかかれたものが、著者が母親の随想をまとめた「好さんの綴り方帖」にあつたので、そのなかから数編掲載した。

「好さんの綴り方帖」をまとめた経緯については、「二女からひとこと」として、駒木さんがかかれています。

明治四十三年十月二十五日、大澤堅治、ヨシノの一人娘として生を受けた母、好（コウ）は、来月、満八十七歳の誕生日を迎える。

「ひ孫二人」にも書いてある通り、米寿の祝いをとても楽しみにしている母である。しかしここ数年は、時々、時間と空間が混沌としてきて、得意だった「綴り方」への意欲さえ薄れてきている様子である。それでも「あさひ川」29号まではなんとか原稿

を間に合わせていたようだが、今年限りできっぱりと筆を折ってしまった。

明治の女の心意気あふれる「甘辛エッセー」をこのまま反故にしてしまうのは何とも惜しいと思った。そんな訳で、これまでに「あさひ川」に掲載された数編を、米寿の記念としてまとめたのがこの一冊である。

子や孫、ひ孫、更には母を知る周囲の人達に、明治、大正、昭和、平成の時代を、元気印で生きてきた「好さん」のつぶやきに耳を傾け、併せて現在のあるが

ままの姿をも受け入れていただければ嬉しい限りである。

（田鶴子）



をと山はたは名称  
小説32年123は  
小澤書店出版名  
同名大澤書店  
名篇（昭和2月）  
の青春大創業  
郎青大澤書店  
次郎の町（18年）  
洋化のある大澤書店  
石坂川で明治が、鮮進堂、使

\* \* \*

著者との会話の中で、大澤鮮進堂と樋渡義一氏（中山人形）の關係が話題になり、樋渡氏が製作した人形をみせてくれた。「昭和十一年旧三月一日 田鶴子の初節句に 樋渡瓦山氏より贈らる」というものだった。



また、大澤鮮進堂と樋渡義一（瓦山）氏の關係が詳しくのつている小川笙太郎氏の「横手／方言散步」がネットにアップ (<https://dialect.rtok.net/>) されているので、それから紹介する。段落の始めは、一字下げにし、また、単純な入力ミスは訂正した。

## 五、『平鹿方言考』（細谷則理著）を歩く

（4）おわりに

平成18年（2006）8月8日、『横手郷土史研究会・80周年記念の会』が開催され、「秋田県郷土史研究の先人に学ぶ」（講師・田口勝一郎氏）の講演での、横手の先人たちの歩みにあらためて感銘を深くしたものでした。その先人のひとり、細谷則理にも言及されたのですが、やはり、地方史研究家としての側面がつよく、方言研究の足跡については語られなかったのは残念でなりませんでした。

『平鹿方言考』のみならず、『秋田方言』（県学務課刊）編纂委員の足跡などをみてきたひとりとして、どうしても、この80周年記念の年に、細谷則理のこれまであまりとりあげられずにきた「方言研究」の足跡をなんとかまとめねばと思うことしきりでした。いま、なんとかまとめてはみたものの正直なところ、その一端にわずかに触れることに終わってしまい、自分の不勉強さ、力なさを痛感するばかりです。

明治期の方言研究の草分け的な存在であった細谷則理の、その一端に追ること、これからの研究の一助

にでもなることができるのであれば望外のよろこびです。

細谷則理は地方史研究家であり、歌人でもあり、また、方言研究にも大きな足跡を残しました。そのうえ、「秋田県地理唱歌」・「秋田県歴史唱歌」（ポケット判）の出版・刊行の足跡も残しました。横手図書館蔵「新撰秋田県地理唱歌全」から横手を歌った部分を次にあげてみます。

44 清原氏の住みたりし

金沢柵のあと訪へば

昔の事を告げがほに

老木の杉に嵐吹く

45 兵（つわもの）伏せし その上に

雁の乱れし 野やいづこ

名の流れたる厨川

むせぶ水音ものすごし

47 国、県道の四通して

四方の産物より集ひ

商（あきない）しげき 横手町

実（げ）に県南の 一ぞかし

48 代々戸村氏 住まれつる

阿桜城趾 ここにあり

その眺望のすぐるれば

いま公園と せられたり

巻末の広告欄には、「歴史唱歌」も同じように、鍛冶町大沢鮮進堂出版とされています。「歴史唱歌」のほうは、図書館蔵にも残されてはいなかったようです。あきらめかけていたところ、『秋田県教育史』に、このふたつが、ともに楽譜つきで掲載されていることを知りました。それによると、「秋田県地理唱歌」は明治33年12月13日に、「秋田県歴史唱歌」は明治34年4月7日に刊行されたとあります。この時代の出版事業という文化の先端にかがやく大沢鮮進堂と、細谷則理との親しい連携ぶりがみえてくるというものです。

このほかにも、大沢鮮進堂の出版は主に教育面にも広くおよんだことが広告欄からみえてきます。鮮進堂店主・大沢堅治氏と細谷則理との地方文化へのともしびを高くかかげた、そのあらわれのひとつだったことも知らされます。

ふたりの深い親交に結ばれていたことのひとつのあかしとして、次のエピソードをあげることができます

思います。

鮮進堂店主・大沢堅治氏と細谷則理は、同じ年生まれと聞きます。親交あつかった大沢堅治氏の三人のお孫さん誕生に際して、その名付け親が細谷則理だったというのです。このエピソードを語ってくださったのが、その名付けをうけられたご当人、田鶴子（たづこ）さんです。その名付け書（命名書・由緒書）までも送っていただき、お借りすることもできました。お話によ

大澤家に因み

詩経に  
鶴鳴于九臯 聲聞于天 の

意味を祝ひて

大澤 田鶴子（たづこ）

昭和十年乙亥二月二十日午前九時三十五分  
旧十月二十五日庚子日 出生

昭和十年勅題 池邊鶴

十一月二十八日 親王殿下御誕生の當日

町役場へ 出生届済

ると「田鶴（たづ）子」は三番目の孫で、一番目『須賀子』、二番目『兌貞（みちさだ）』も細谷さんの命名ということだそうです。お借りした命名書は、すでに70年もの時を経て、もういまでは触れるとかさかさとして崩れてしまうような状態……でも、なんとか複製、コピーまでしてくださり、送っていただけましたもの。

さすがに細谷則理です。中国最古の詩集『詩経』を大典とするというのですから、名付けのふかさに驚かされるといふものです。ちよつと難解な語句は「九臯（きゅうこう）」。辞書には「奥深いさわ。深く遠い所のたとえ」とあって、「鶴鳴く」とともに、この詩句のキー・ポイント。

大澤家の名に因んで

『詩経』の

《鶴鳴于九臯（つる キユウコウに 鳴き）

聲聞于天（こゑ 天に きこゆ）》

の祝意から

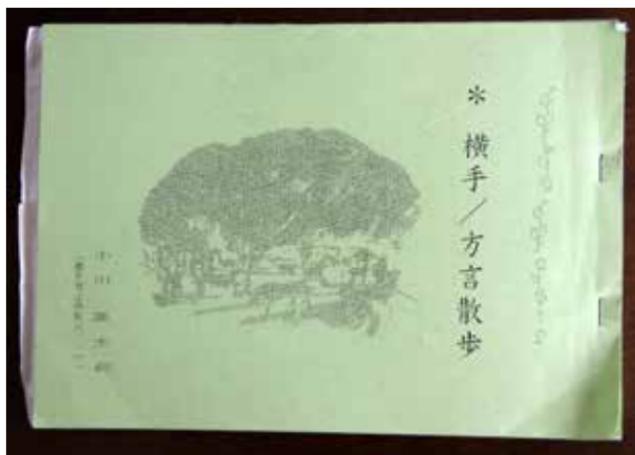
## 大澤 田鶴子

(と命名)。

命名の由緒です。この《鶴九臯に鳴き》の詩句から、『九臯の鳴鶴』（キユウコウのメイカク）という成語も生まれたといわれます。この詩句の意味は「奥深い沢地で鳴いている鶴。その声は天まで聞こえる。つまり、身を隠しているにも有名になるとえ。」と辞書にあるように、《遠く奥深い沢田に鳴く鶴》という深遠さを湛え、《田鶴》の天に聞こえる風趣とあいまって、やがて舞い立つであろうという余韻までうかがわれます。この詩句を出典とした、細谷則理の滋味あふれる名付けの深さがわかります。漢文学者であり、歌人でもあった細谷則理ならではの命名には、ただただ感嘆するばかりです。

この細谷則理の名付けに込められた、深遠な風趣あふれる《田鶴》の命名を一身にまとわれ、成長された田鶴子さんは、『第一回秋田県現代詩人賞受賞』の現代詩人です（もと教師。詩集数冊。十文字町在住）。

しかも、夫君駒木勝一氏は、国語教育家・音声教育研究者として秋田県のみならず、全国的に知られた方言（音声）教育の実践家であることも考えあわせてみ



れば、歌人であり、また方言研究家でもあった細谷則理との不思議な縁を思わずにいられません。いまごろ、細谷則理は、遠くどこかから、にんまりとほえんでおられるのではないのでしょうか。

「おわりに」には、二〇〇七年（平成 19 年）三月、とあるから、発行は、その頃とおもわれる。（駒木田鶴子氏所蔵）